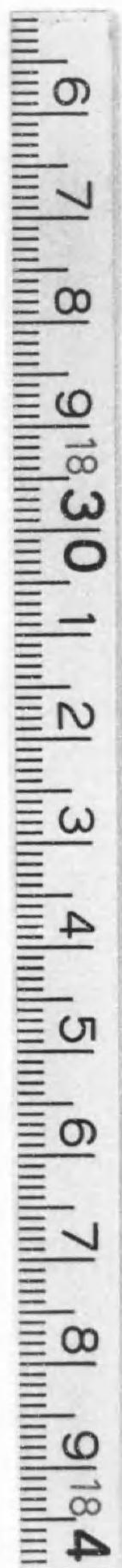


385
444

中
記
記
記
記
記
記
記



始





中克



特217

579



書
之
句
集



序

辱知春光君、斯道に入つて四年、四百余句を録して春光句集を著し、僕に序を求めらる。乃ち、僭越を顧みず小序を付す。

俳句とはドンナものかと申すに、芭蕉の俳句と、芭蕉の所謂他流の俳句とは一樣にいへない。コ、には、芭蕉の俳句に就て、いさゝか、申述ふるに止める。夫れ、芭蕉の俳句とはドンナものか、簡短にいへさうでゐて、しかも、ソウ簡短にはいへさうもない、アレコレと考へてゐるより、いつそ、思ひ出るまゝを、ホツ／＼書き記すに及かさらんか。

芭蕉は、我家の俳句は思慮分別の外なりといへり。思ふに、芭蕉一代の言説、この一語に盡きたりといふべく、一語深遠、芭蕉に學はんとするもの、先づ、コ、に留意せざるへからず、コ、のところ、ウマク呑込れば、芭蕉の道は、

直ちに眼前に明かなり。然るに、肝心要めのところを、軽々看過して、いそいで末に趨き、いつの間にか、芭蕉に遠さかつてしまふ、慨すへき哉。

つらく思ふに、思慮分別の外とは、之をいゝかゆれば、思慮分別の心でなく、思慮分別を絶した心の意にして、心の中、別に心ありと管子のいつた其別の心のことなり。この心境に生れ出る俳句が芭蕉の俳句にして、芭蕉の俳句を純眞の藝術といゝ、澄心の藝術といふもコノ故なり。

コ、のところを詳述せんとして、ナマジツカ多辯を弄すれば、徒らに、紛糾を招くべければ、平らたく之を一言せんに、芭蕉のいふ思慮分別の外とは、取も直さず、人間固有の良心のことにして、佛道には、佛心とも正念ともいゝ、普通に、本心本性といふもの之なり。此心、何人にも具はり、隨時、形を異にして現はれる。例へば、大神の御前に類く時、海濱に初日を拜む時、乃至は、近親の枕頭に病を守る時等、人は思慮分別の外にゐて、之に氣付かず、其場限

りにして、元の空阿彌に戻る。ソレだから、孔子は、深く之を戒めて、學問の要は放心を求むるに在り、といはれたのである。

芭蕉が晩山に諭したのも此意に他ならず。「物識にならんより、心の俳諧肝要に御座候、句者は澤山に御座候へとも、心法を守る人はまれ〜にて候」と。

このことは、歌人藤原定家もいつてゐる。凡そ、和歌を作る場に臨んだら、先づ以て、左の句を誦すへし、意格自高妙なるへしといつて「故郷有母秋風涙、旅館無人暮雨魂、蘭省花時錦帳下、廬山夜雨學庵中」の句を舉げてゐる。流石に定家だ。乞ふ、獨座孤燈の下、試みに三誦して見るへし、而して三誦詩中に入る時、心、水の如く澄むを覺ゆへし、ソコに、和歌の境地があるのだ。

我蕪村のいふところは、モツと端的だ。蕪村は、喪中に在る霞史に消息して「御愁の中にも發句折々可被成候、詩歌ともに愁の中に多きものに候、杜甫の妙句も、多くは、愁の中に候」と、畢竟、愁の中に在る人、本心に還つて居れ

ばなり。

四

余談は此邊で切上げ、翻つて、春光句集を見るに、句作の日淺く、今後の修養に待つべきものありと雖も全篇を通して、嫌味や臭味は少しもない。蓋し、著者の天性に由るのはいふまでもないが、最初に、足の踏込場を誤らす、歩一歩と大道へ出て、クセのつく間もなく、素直に伸ひたからであらふ。

元日やきつゝき叩く裏の山

お降やみあかしあけて持佛堂

七草やとろりととくる粥柱

早春や和布の莖の三杯酢

行春や親を離れて鶏のひな

春潮に育ちて赤き海盤車かな

眞珠貝春の潮に育ちけり

宮様の萱の御門や葺かはる

五

老梅に猫の爪とぐ月夜かな

六

飼鶏にニンニク食はす土用かな

どくだみの花しろくつつゆ曇り

山蟹の殻ぬきかゆる清水かな

魚賣の魚生きてゐる避暑の宿

えごの花ちりて裏川にごりけり

烈日にひた鳴くギスや草いきれ

コスモスや水のあがらぬポンプ井戸

新涼や渚に白きささゞれ石

朝寒や餌虫掘居る濱女房

七

野分止んて蟬ほそくと鳴き出てぬ

八

走馬燈夜一時のまとゐかな

満ち切つて動かぬ汐や天の川

乃木祭や長府の空を飛ぶ蜻蛉

落柿に小雨そぼふる子規忌かな

目白くるや菊戴もまじりくる

松笠にすかりて鳴けり四十雀

高浪に蛸つく舟や冬初め

松葉かいて据風呂を焚く冬至かな

寒雀すゝよごれして遊びけり

九

水そこにゆらぐ藻草や海鼠突

僕は、自分の句作経験に比へて、春光句集に是等の句を見て驚嘆したのである。三年や五年の修業で、よくもコレほどの句が作れたものかなと、つくづく感服する。僕等五六年の句といふものは、ソレはく、お恥しくしてお見せ申せぬ、慚愧く。

以上列記した句の中から、どの句といふことなく、二三句抽出して見る。

元日やきつゝき叩く裏の山

この句、何の奇もなく、有り來りの寫生句に似て、しかも、いつしか、讀者を静寂の境に引入れ、蕭森異人境、坐視動神魂の句を思はせる。

早春や和布の莖の三杯酢

この句、芭蕉集中にでもありさうな句で、幽人幽居の體、髣髴として目に在り。

行春や親を離れて鶏のひな

此句は、晩春物思ひ勝ちの時、親子相寄ることなく、却て、親に離れて、いはゞ、親なし子になつた、あはれ雛鶏の無心が、情け深い著者の目に入つたのである。

朝寒や餌虫掘居る濱女房

此句は、親を離れた雛鶏を憐む心が、形をかへて現れたもので、海風寒き朝

寒の折柄、餌虫掘する濱女房の姿はいじらしい。

二三

野分止んで蟬ほそくと鳴出てぬ

此句は、少し趣を異にし、今まで暴威を逞ふしてゐた野分も、漸く吹止んで田園荒涼夕べに近く、一蟬ほそくと鳴出つるあたり、寂々寥々、人寰の外なり。

松笠にすかりて鳴けり四十雀

一幅の好書、四十雀を知るものにあらずんば能はず。

松葉かいて据風呂を焚く冬至かな

此句、早春や和布の莖の三杯酢と一脈相通するものあり。心地恬怛、古人を

見るか如し。

眞珠貝春の潮に育ちけり

春の海、浪暖かにして、眞珠の珍珠事なく育つ。まさに、寶の島。次にあくへきは、著者か海邊に住んで、従て、海邊の句の多いことで、しかも、ソレ〜に面白い、春光句集の特色の一たるへし。

僕等山國に住して海を知らず、海の句を見ると、一入、海が慕はしい、海邊に尻をすえて句作したらさぞと思はれて、美望に堪へぬ。今、試みに春光句集から海の句をあけて見る。

岩頭の雪をそめたる初日かな

二三

初風や海鼠ころがる磯の岩

春光や海老とふ岩の溜り水

春潮にそたちて赤き海盤車かな

ぬけ出して殻すみかゆるがうな哉

干和布ほとく落つる汐しづく

塩からき濱井の水や早雲

五月川押出す浦のにごり哉

魚賣の魚生きてゐる避暑の宿

高浪に蝟つく舟や冬初め

蟹仙人掌のさいて久しや避寒宿

水底にゆらく藻草や海鼠突

かき舟のともる障子や枯柳

等々枚舉に違はない。

終りに、春光句集から、人のあまり取扱はない題材を取扱つて、新を求めすして、而して、新なる句をあけて見る。

初賣や漁師相手の小商

飼鶏にニンニク食はす土用かな

山蟹の殻ぬきかゆる清水かな

コスモスや水のあがらぬポンプ井戸

新涼や渚に白きさざれ石

乃木祭や長府の空を飛ぶ蜻蛉

目白くるや菊戴もましりくる

以上、ソコ／＼に看過し、意を盡さゝるものあり、二集三集の時を期す。

昭和十三年戊寅春

鬼城

自序

俳句をはじめから四年目、まだほんの斯道の幼稚園に過ぎない僕だが、一昨年来鬼城先生の御教へを受ける様になつてから、先生の御選になる句が、四百余りとなつたので、句の散佚を恐れ、且つまた將來の参考までに、こゝらで一冊に纏めて見る氣になつた。

今後三年乃至五年に一度位、斯様にして、拙句を纏めて行き度く思つてゐる。終りに、鬼城先生から過分の序文を頂戴致した事は、著者の光榮之に過ぎるものはない。こゝに謹みて、御厚禮申上げる次第である。

尙卷尾に妹たみ子の作句で鬼城先生の御選になるものをものせて置いた。

相州葉山にて

春光識

昭和十三年天長節の日

目次

新年

時候……………三頁

天文……………五頁

人事……………九頁

動物……………一三頁

植物……………一五頁

春

時候……………一九頁

天文……………二六頁

地理……………三三頁

人事……………三七頁

動物……………四二頁

植物……………四六頁

夏

時候……………六二頁

天文……………六四頁

地理……………七〇頁

人事……………七三頁

動物……………七六頁

植物……………八三頁

冬

時候

天文

地理

人事

動物

植物

一三五頁

一三四頁

一四二頁

一四五頁

一五〇頁

一五六頁

秋

時候

天文

地理

人事

動物

植物

九五頁

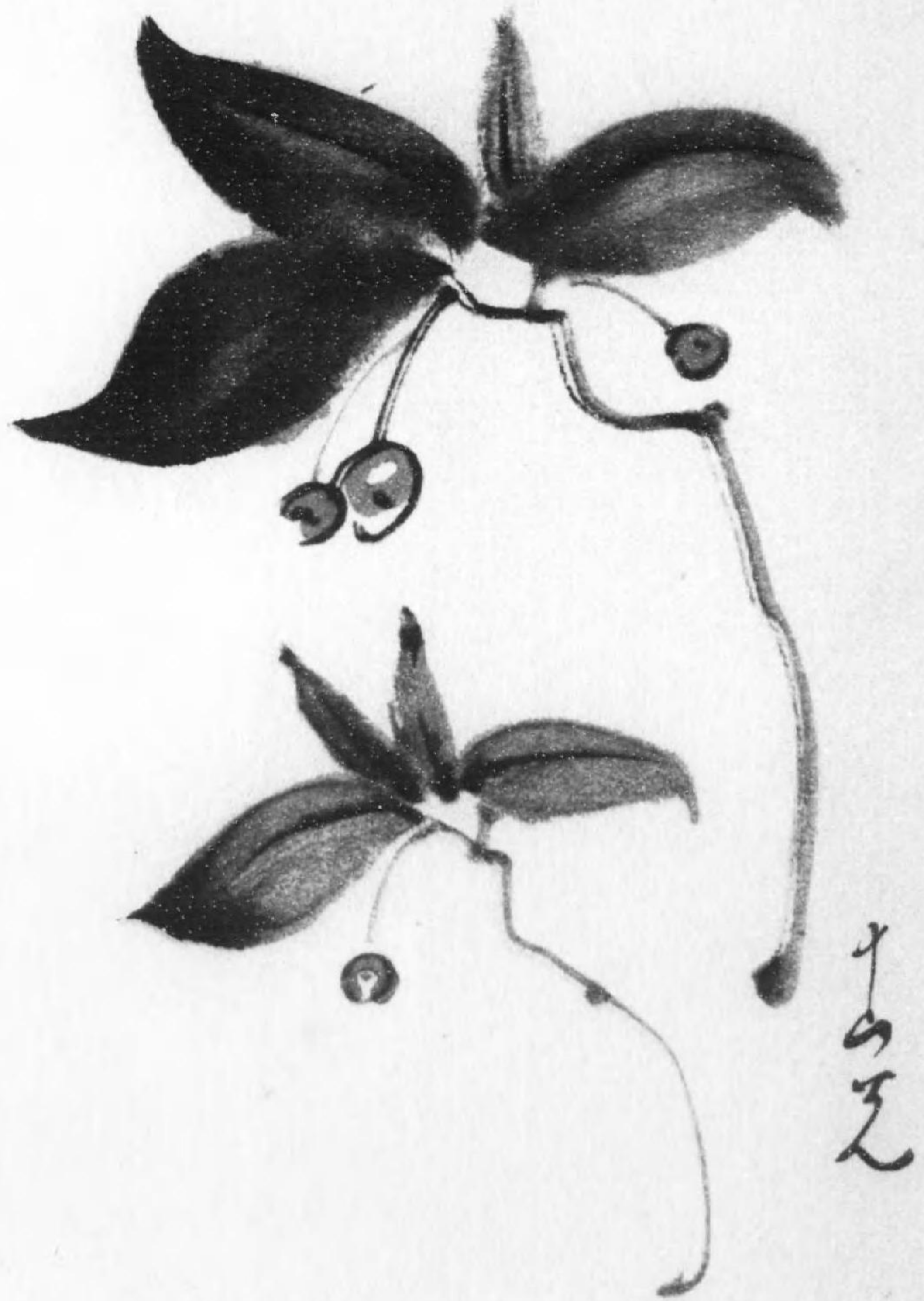
九九頁

一〇四頁

一〇六頁

一〇八頁

一二五頁



たみ子

たみ子雑詠……………一六頁

新
年



時
候

元日やきつゝき叩く裏の山

元日やひそかに青き路の臺

元日やこそりともせぬ裏の簀

松が枝に遊ぶひがらやお元日

神泉に鶴の歩みや今朝の春

松過や取りかたづくる金屏風

天文

神苑に神馬いなく初日かな

岩頭の雪を染めたる初日かな

初風や渚づたひに石叩

初風や青海苔かむる岩頭

初風や神の島浮く古都の浦

初風のブイにこまれる鷗かな

初風や海鼠ころがる磯の岩

初東風や鶏舎にさげたる鮑殻

初霞岩なきうつる濱千鳥

お降^{まがり}や御あかしあげて持佛堂

人事

門松やもの静かなるビルディング

輪飾や水の上らぬポンプ井戸

鶏ないて折り焚く柴や初竈

初賣や漁師相手の小商あきなひ

はらかなのいつ枕や寶船

書初や墨すりおろす靜心

懸腕直筆紙に聲ある試筆かな

移りゆく川原つむじや吉書揚あひ

風向きの又變りたるどんどかな

獅子舞を母にかくれてのぞきけり

七草やとろりととくる
粥かゆ柱はしら

餅花のかげにぎはしき障子かな

餅花やとろく燃ゆる圍爐裏の火

動物

勅題に因みて

初鷄や雪にうもるゝ大藁屋

からくとかくむ車井や初鴉

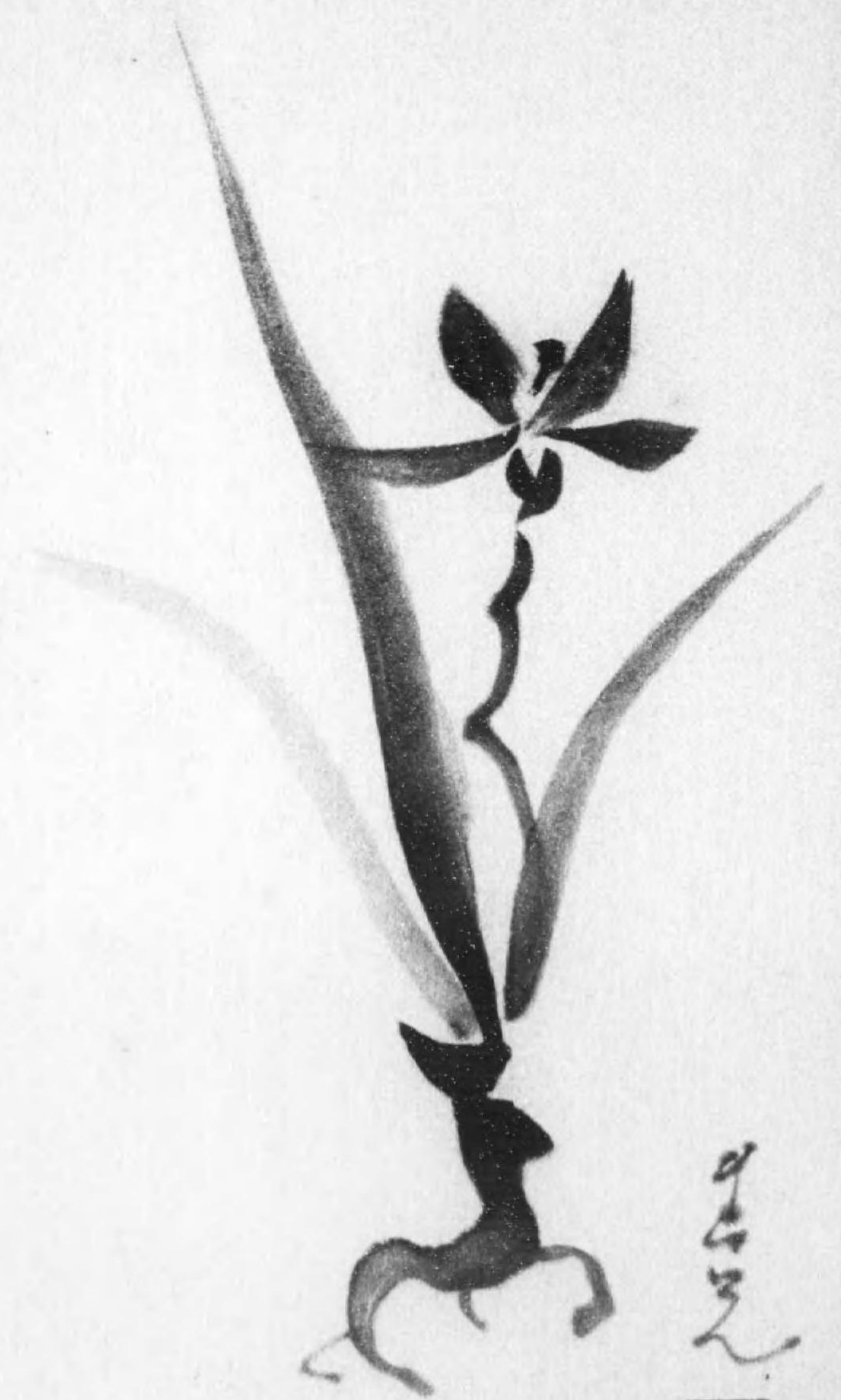
松の雪散らしてたちぬ初雀

植 物

雪の上のこぼれ松葉や初雀

薺つむや波かけ上る磯づたひ

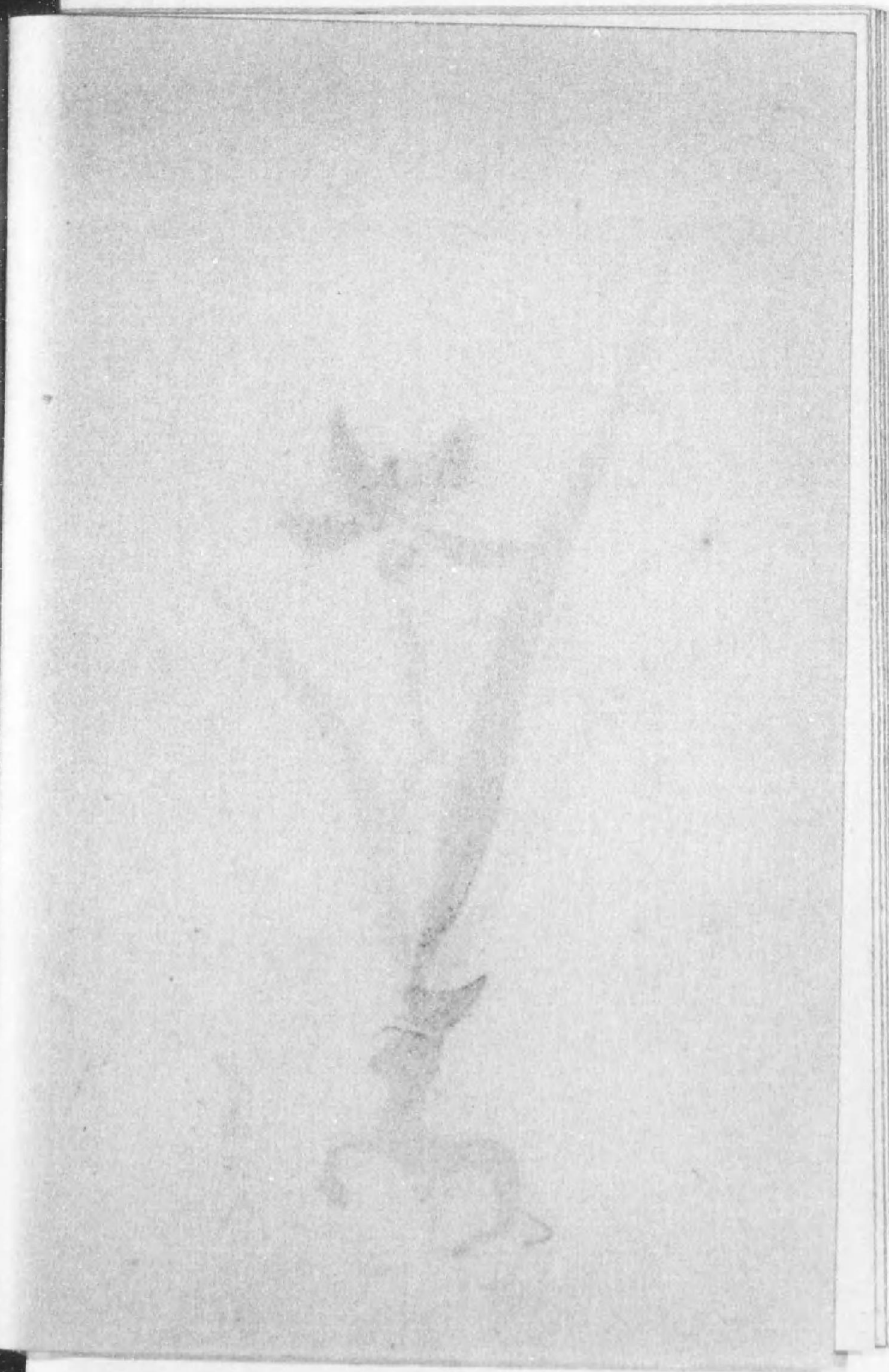
あげ舟をめぐりて薺つみにけり



あきつ



春



時
候

立春や脊戸の小藪の露の臺

春寒や磯菜かぎとる蟹が妻

春寒やかぎつくしたる蒨ほろ蒨れん草

春寒や蒨蒨草の莖赤き

白魚の鴈はらわた見ゆる余寒かな

鴨の尻聲長き余寒かな

早春や菊菜かぎこる裏畠

早春や潮風強き海苔干場

早春や底浅く澄む池の水

早春や若布ひさぎの濱娘

早春や和布の莖の三杯酢

かぎ取れば匂ふ菊菜や春浅き

甘鯛を干す蟹が家や春浅き

暖や渚に拾ふ櫻貝

暖やつむれずにある枯葎むら

垣作る竹磨き居る日永かな

鶏にひんの巢につきたがる日永かな

摺鉢に貝の潮ふく日永かな

長閑さや温室村の鶏がなく

白鳥の水尾ひく湖のうらゝかな

春晝やピアノの上のチューリップ

春晝やかをりたゆたふ沈丁花

楫ゆづりばの落葉して居る彌生かな

ゆく春や親をはなれて鶏のひな

銀杏の芽風にほぐる、暮春かな

春闌けて杉菜の土手となりにけり

天文

東風ふくや磯の香高き濱廂

東風吹くや牡蠣殻光る磯の岩

東風吹いて孟宗簔の光りけり

風光る一枚岩の溜り汐

門を出てすぐ麥畠や風光る

春光や海老とぶ岩の溜り水

傘さして汐木拾ひや春の雨

春雨のそゞくや岩の溜り汐

妹の御茶の手前や花の雨

虫柱たちたる彼岸曇かな

花曇虫柱たつ芝の上

春雪や青海苔かむる岩頭

春雪や庭木に遊ぶ群ひがら

春雷や穴這ひ出づるさゝら蟹

春雷になき立つ園の孔雀かな

地理

雪解や藪にかけたる鶉つぐみわな

溪たに々に轟なうつる雪崩だれかな

春泥に落ちてでん／＼太鼓かな

生き残る鉢の金魚や水ぬるむ

ペリカンのあさる小魚や春の水

春海や子供乗せたる傳馬船

春潮や雑魚撲り捨つる手繰網

春潮に育ちて赤き海盤車かな

春潮や小海老はね飛ぶ浮藻草

生簀からあぐる真鯛や春の潮

眞珠貝春の潮に育ちけり

人事

宮様の萱の御門や葺きかはる

麥踏や漁師かたでの小百姓

業卒へて故山の姿見る日かな

春の燈や別府土産の竹細工

春燈や寶石商のシヨールウインド

結納の大水引や春灯

野火消えてほとぼりのこる巖かな

摘草にはなれぐの姉妹かな

松風の出てあげ汐や汐干狩

磯遊び拾ひ集むる五色石

動物

戀猫や月の藁塚なきめぐる

燕來て京菜は花をつけにけり

燕を溪へ吹き込む風かな

櫻鯛せな見せ泳ぐ生簀かな

尾頭のをしきにあまる櫻鯛

うづまいて小門の矢潮や櫻鯛

白魚ののぼるや月の多々良川

川風にたける篝や白魚網

岩礁に潮のたぎる鮑かな

江の島や傘からかささして榮さか螺ぶ賣え

かけ茶屋の飯のかたさや焼榮螺

寄居虫よこむや岩の凹みの溜り汐

ぬけ出でて殻すみかゆるがうなかな

死にたへし金魚の池や蛙の子

千町田の一つ家灯る蛙かな

風にのつて屋根うち越ゆる蝶々かな

植
物

梅さいて暈きる月の和みかな

老梅に猫の爪さぐ月夜かな

茶がら捨つる脊戸の垣根や梅の花

梅林をぬうて流るゝ小川かな

梅匂ふ闇に音ある笈かな

梅咲くや築地めぐらす城下町

花散る鎌倉やばた餅寺の鐘がなる

花散るや音なし川の濁り水

山櫻散り込む溪たにの深さかな

芽柳や鹵簿肅々と二重橋

芽柳やお堀に鴨の居ずなりぬ

猫柳ほゞけてにこる小川かな

木の芽風雨ごもなひて吹きにけり

たらちねの病癒えたり木の芽晴

桃の村日中の鶏のうたひけり

海棠に藁ふきかへし茶寮かな

藁屑を運ぶ雀や竹の秋

蜘蛛の圍にこぼれて久し黄揚の花

崖上の二階家の藤咲きにけり

山吹や厩に馬のおこなしき

大岩をしばりて蔦の芽生えかな

菜の花や車窓の左右の夕あかり

畦道へ牛をよけたる薊あざみかな

潮風に砂山まろき薊あざみかな

蒲公英や馬踏み崩す畦のふち

露の臺や蟹が垣根のうつせ貝

藁塚の片くづれして下崩ゆる

若草や角笛ふいて羊飼

はこべらやひよこをねらふ鳥猫

干若布ぼこく落つる汐栗

一村をあげて若布を刈る日かな

漕ぎつらね場所うつりしぬ若布刈船

青海苔をかむる巖や群れ鷗



牛
山
元



夏



時
候

畦道に野蒜花咲く立夏かな

初夏や影つくりたるブラタナス

あまちやづる伸びし垣根や夏初め

夏の夜皇軍の勞苦をやほとぼりさめぬ鐵兜

短夜や山越えて來る魚車

短夜や消え残りたる星一つ

飼雞にニンニク食はず土用かな

斑猫はんねこの離れぬ道や日の盛り

干草のむるゝ匂ひや日の盛り

秋近し紅さしそめし蔓荔枝

天文

五月雨や根をおろしたる苺づる

五月雨や門を過ぎ行く傘直し

繭の花こぼれつゞきて五月雨るゝ

どくだみの花白々と梅雨曇

梅雨晴や實のはじけ飛ぶ庭石菖

南風や皆動き居る蟻あまぎ卷まき

濱豌豆花咲く丘や南風

出帆のドラが鳴るなり雲の峯

汐落ちて磯の香高し雲の峯

江の島の板橋長し雲の峯

雲の峰翼を張りたるグライダー

塩からき濱井の水や旱ひでり雲

炎天や砂塵まきあげ装甲車

松の木に蟹よちのぼる夕立かな

くちなしの花の白さやはたゝ神

地理

五月川押し出す浦の濁りかな

紫陽花の毬の下ゆく清水かな

山蟹の殻ぬぎかゆる清水かな

紫に茄子つやくし夏の露

露涼し籠の中なるちぎりもの

滴や巖苔生ふる崖の端

土用浪蜚が垣根の藻汐草

人事

朝風にひよこ生まるゝ端午かな

菖蒲葺くや屋根にほゝけし鼓草

丸窓に竹のそよぎや更衣

出征の留守を守りて田植かな

大藁屋深閑とあり田植留守

打水や岩の上はふつくり蟹

噴水や或は高く又低く

魚賣の魚生きて居る避暑の宿

納涼や裏木戸あけて月の磯

夜光虫光る渚の納涼かな

くちなしのほのかに匂ふ曝書かな

虫干や有用の書無用の書

高々と吊つて新らしき蚊帳かな

小蒸氣のうすよごれたる日覆かな

土産店たち並びたる日覆かな

動物

舟曳いて上る早瀬や河鹿なく

ぬぎかへてやはらかき蟹の甲かな

眞水湧いて流るゝ磯や蟹遊ぶ

瀧茶屋の蔭こゑの上這ふ小蟹かな

唐松の下ゆく徑や蟻の塚

羽蟻わくや雨もよひなる夕ほめき

ねずみもちの花こぼしけり梅雨の蝶

螢一つ蚊帳を離れて飛びにけり

苦舟の夕餉の煙や飛ぶ螢

よもすがら蚊に寝ぬ籠の小鳥かな

追ひついて一つとなりぬあめんぼう

植 物

奉納の杓文字の山や若楓

下闇や白々と咲く著莪の花

木下闇面うちたる大蛾かな

下闇や山ひろのふる雨もよひ

川波にくだくる月や夏柳

竹の皮散つて下草茂りけり

夕風にかそけき音や竹落葉

青梅の落ち込む闇の古井かな

桐咲くや黒煙吐く陶器窯

えご咲くや川に張りたる四ツ手網

えごの花散りて裏川濁りけり

卯の花や雨だれつたふ廂藁

金雀枝の花吹きわくる嵐かな

山小屋の灯ごもし頃や百合の花

温泉げむりにくもる鏡や百合の花

玄關の立かけ傘や四ひら咲く

赤茄子や別荘番の草むしり

ちよろくこ穂に出る麥や瘦畠

月見草月にきらめく川瀬かな

蟹が子の汐木拾ひや月見草

月見草道より低き大藁屋

月見草ほこぼりさめぬ河原石

晝顔やレール敷きたる短艇庫

晝顔や砂に干からぶこぼれ魚

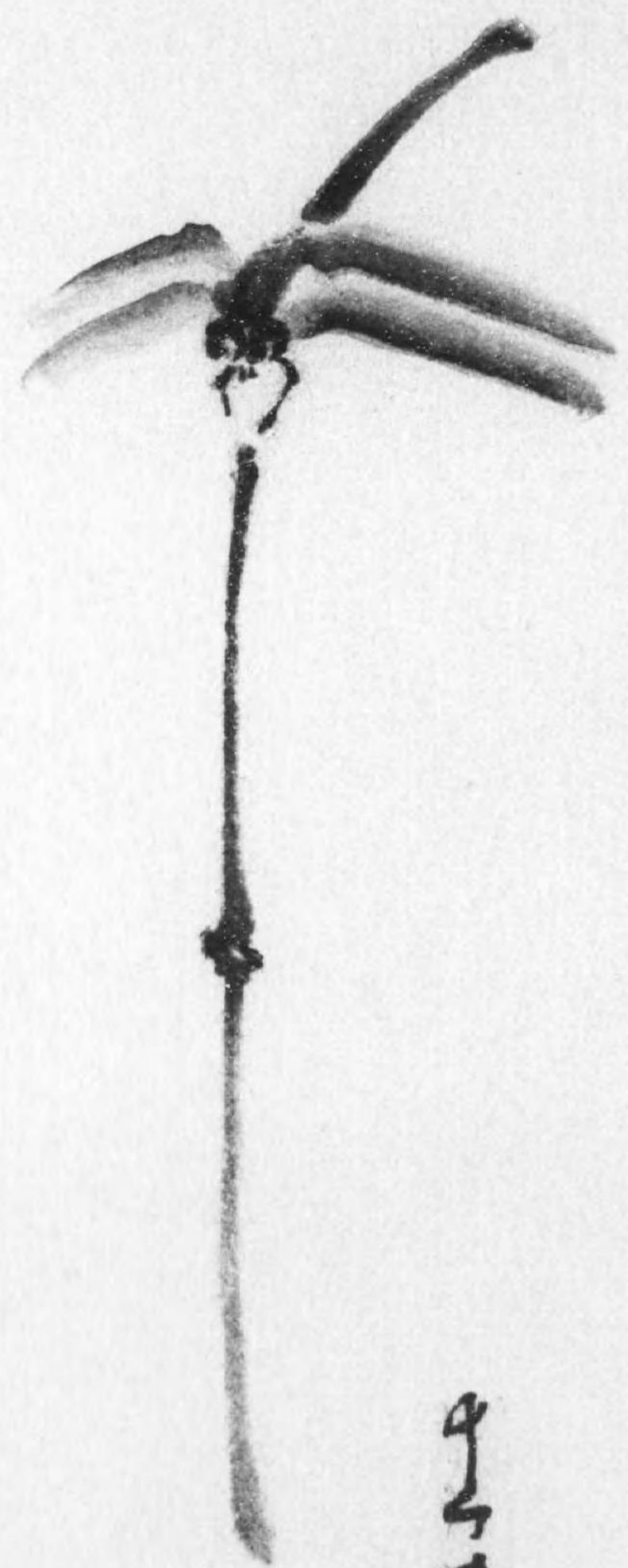
どくだみに米の研汁流しけり

大岩に生えて花咲くすぐさかな

老杉を洩るゝ陽筋や苔の花

捨てゝある猫の死骸や草いきれ

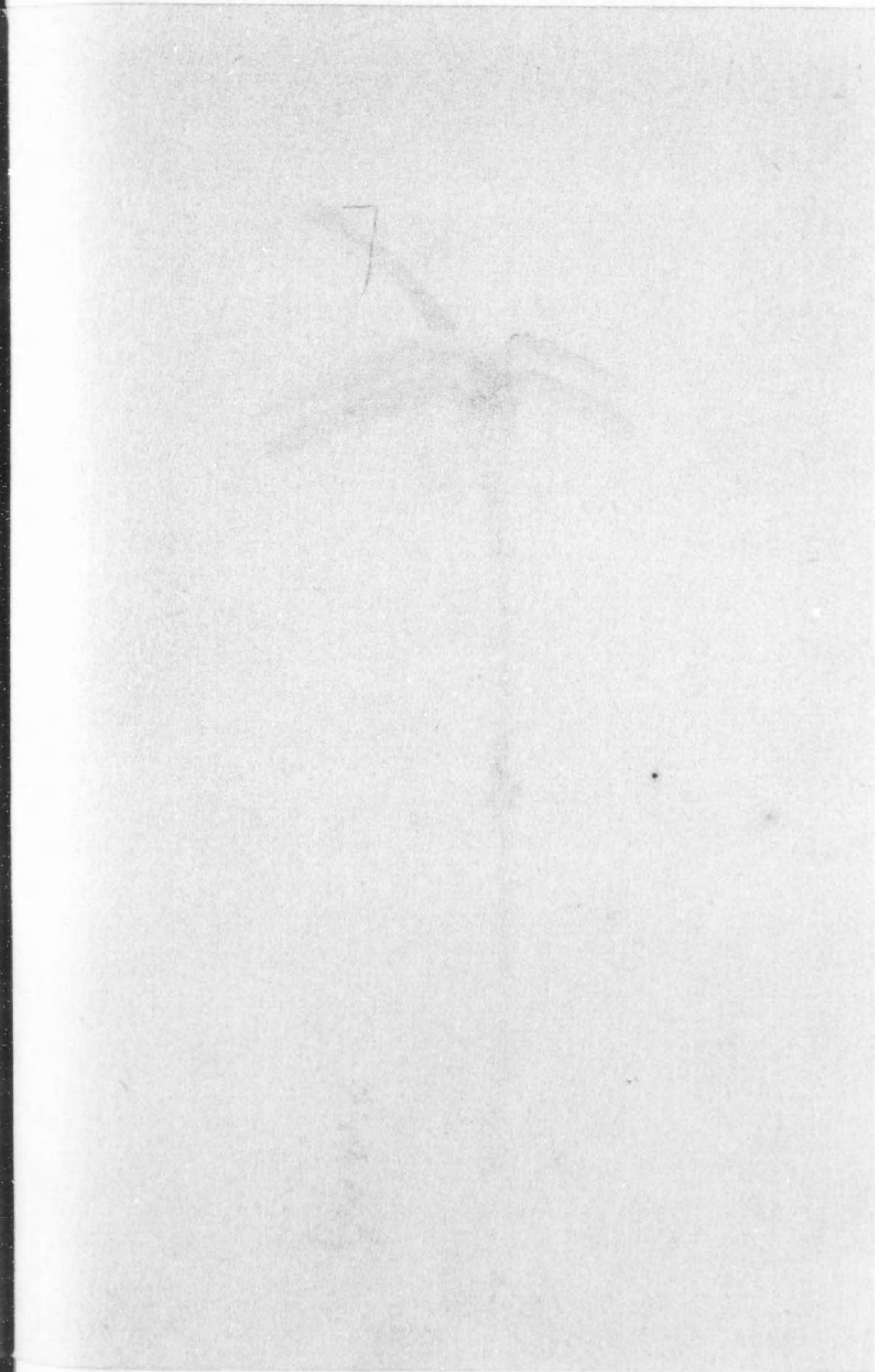
蛇の尾の見え居る草のいきれかな



中々

烈日にひたなくギスや草いきれ

秋



時
候

いつまでもトマト花咲く残暑かな

仙人掌の二度の盛や秋暑し

秋暑うトマトをつゝく鳥かな

新涼や渚に白きさざれ石

新涼や渚に青き藻汐草

新涼や虫もつかづに唐辛子

新涼を無沙汰の手紙書きにけり

冷かや水に脱ぎたる蟹の殻

朝寒や餌虫掘り居る濱女房

秋の夜やそここもわかぬ茶立虫

雞の早どきつくる夜長かな

袖すれて壁砂落つる夜寒かな

山蟹の穴にかくる、暮秋かな

天文

秋天に吹き上げられぬ虫柱

秋日和旗竿賣の通りけり

秋晴や實を結びたる藪虱

月出でてきらめき初めぬ浪頭

木犀きげいのほのかに匂ふ月夜かな

朝霧や鷗なき居る沖の岩

唐黍の穂に秋風を見る日かな

秋風や穂を出したる相撲草

野分やんで蟬ほそぐこなき出ぬ

満ち切つて動かぬ汐や天の川

汐満ちて藻屑動かぬ銀河かな

秋雨や色失へる子持蟹

秋雨や竈かまどにいぶる青松葉

蟹は穴にかくれて秋の時雨かな

地理

秋山の岩ひやゝかに憩ひけり

秋の水葉蘭浸して流れけり

落松葉踏めば湧きけり秋の水

人事

一〇六

花火消えて空に残りし北斗かな

燈籠や汐風落ちし濱廂

走馬燈夜一時のまどゐかな

乃木祭や長府の空を飛ぶ蜻蛉

落柿に小雨そぼふる子規忌かな

一〇七

囀おこりなけば空ゆく鳥の應こたへけり

動物

苦舟のかゝる入江や鳥渡る

屋根草のほゞけ飛ぶ日や鳥渡る

渡り鳥一羽おくれて渡りけり

鶉ひよこや食たひこぼしたる青木の實

一溪をへだて、鶴ひよの應へけり

鶇もやの來て靜まる軒の雀かな

鶴せき 鶴たひ やかき殼かき 光る岩づたひ

鶴つる 鶴つる や屋根飛び越えて中庭へ

波の來て岩うつりする石叩

宮様の杜もり 深々こてらつゝき

目白來るや菊戴いたゞきも交り來る

松子まつきにすがりて鳴けり四十雀

秋の蝶渚づたひに飛びにけり

かなくの終日ひね鳴けり山の宿

蝸ひいらしや梢に残る夕日影

連山の晴れ極はまりし蜻蛉かな

蜻蛉や花をつけたる川原草

八ツ手葉の重なる闇や鉦叩かねたたき

あげ舟の底になきすむちゝろかな

日の匂たゝよふ徑やごぶばつた

植 物

竹 春や月かげもるゝいしだみ 蟄

芭蕉葉の窓一ばいに戦たたかぎけり

菊の花の咲いて日和の定りぬ

萩さくや小溝にならぶ蟹の穴

老松の根もこの桔梗折りゆかん

目黒大原を去るにのぞみて

桔梗ききやうの蕾つぼみつぶらや萱あしはらの中

故郷に似たる山河や秋の草

秋草や富士を映して澄める湖

コスモスや水の上らぬポンプ井戸

汐風にもまれてたてる尾花かな

背囊に芒さしたる兵士かな

明神葉山森戸神社や小松が中の彼岸花

末枯うらや日は照りながら雨の降る

山葡萄茨の中に見つけけり

蓮の實の飛んで濁りぬ鯉の池

鶴ヶ岡八幡宮にて

濱風に數珠玉なつて日和かな

蔓引けば音して落つる零餘子ひかこかな

草じらみなかく取れぬ毛布かな

初茸や富士の裾野の小松原



94
元

冬

Winter



時 候

高浪に蛸たこつく舟や冬初め

鴨鴨の聲のするどく寒に入る

青木の實かたまりうれて寒に入る

からたちの棘の尖りや寒の入り

焼鮎にとほすころ火や寒の内

大寒や石^あ尊^{かさ}かむりし岩頭

大寒や簾底くゞる三^み十^と三^そ才^{さい}

大寒や裂けてはね飛ぶ^ま杙^{こぎ}の實

鎌倉宮
くらがりの土牢拜す寒さかな

柚人の鋸の齒たつる寒さかな

火鉢客去りての火かきとる部屋の寒さかな

座布團客を見送りてを取りかたづくる寒さかな

冴ゆる夜や燭して通る長廊下

天井に壁土落ちて冴えにけり

板橋を歩く鳥や冬ざるゝ

冬ざれや蓮田のくぼのかなけ水

冬ざれやたばねあげたる桑の枝

冬ざれや鳥のあさる塵捨場

小春日を九官鳥の機嫌かな

穴を出て蟹のうろつく小春かな

蝶上る茶の花垣や小六月

花つけし蟹仙人掌や冬ぬくし

松葉かいてする風呂をたく冬至かな

年の瀬や不漁つゞきの漁師町

除夜の鐘大藁葺のだんな寺

沈丁の蕾久しや春をまつ

暈かさかゝる月の和みや春隣

天文

切干の乾く匂ひや冬日和

冬晴や目白さへづる雑木山

冬風や渚に拾ふうつせ貝

冬風や鷗こまれる航路ブイ

風やにほ吹きよする芦のひま

風や泥波かむる蓮はすの葉

風や吹き散らさるゝ波頭

風の吹きへらしたる葎ひらかな

風やさけちぎれたる芭蕉の葉

時雨つゝ濱女房や汐木とり

一所星のきらつく時雨かな

初霜や日の當りたる蜜柑山

霜どけの藁にほけむる朝日かな

初雪に青きバセリや畑小隅

高浪に鷗うきたる吹雪かな

早はや鞆たもとに潮たゝかふ吹雪かな

しづり雪かげして落つる障子かな

煙あげて雪のしづるゝ檜原かな

枯芦に霰打ち込む古江かな

霰みぞれるゝや蓮田の水はかれはてゝ

糸蘭の糸のすがれや寒の雨

地 理

新皇軍武運長久

朝詣天地の凍ひよにぬかづきぬ

冬山や谷うつりする鶉ひよの聲

冬山や笹こそつかす三十三みそ才さい

大瀧の水涸れはて、山眠る

大岩のうづくまりたる枯野かな

川涸れて鐵橋高くかゝりけり

川 涸 や 鶺鴒^{せきぎ} 鶺鴒^{せきぎ} 歩 く 岩 の 上

蛸 壺 を 引 き 揚 ぐ る 舟 や 冬 の 海

高 波 に 魚 摺 む 鳶 や 冬 の 海

冬 海 や 鷗 に 交 る 信^あ 天^{はら} 翁^{おきな}

人 事

軒 高 く 割 積 む 薪 や 冬 構

フレームの油障子や冬構

馬小舎や藁敷きかへて冬構

冬籠時化つゝきなる漁師町

ずんぐり延び来る木影や日向ぼこ

蟹仙人掌の咲いて久しや避寒宿

蜜柑山かこみてぬくし避寒宿

寒燈や引手とれたる古襖

寒燈やうづくまりたる己がかげ

湖に遠山火事の映りけり

煤掃いて神棚に灯をこもこけり

煤竹のうち上げられし渚かな

しだ屑のまじりし塵や掃納め

動物

水鳥や戸をござしたる短艇庫

水鳥や雪消えのこる岩のくぼ

水鳥や芦の折れ伏す江のほこり

鴛鴦うしや池に落ち込む松の雪

鴛鴦や羽つくろひして岩の上

鳩はまなくや池畔に立てる地藏尊

生簀籠にゆられて鳴ける千鳥かな

千鳥鳴くや河原に座る屋形船

千鳥啼いて雪こなる夜や琴の浦

打ち上げし猫の死骸や寒鴉

寒雀ささ鶏と舎やよりたちて椎の木へ

寒雀すゝよこれして遊びけり

笹鳴や障子に映る干大根

笹なきや藪の徑の柴車

鶏小舎の統計表や寒玉子

水底にゆらく藻草や海鼠まごつき

外浦や舟かたむけて海鼠つき

をちこちの岩に雪ある海鼠かな

植 物

ほそぐさつゞく徑や冬木立

連山の雪かゞやけり冬木立

星空を風吹きまはす冬木かな

樓門に日の當りたる冬木かな